

研究会報告 第3回 平成 25 年 12 月 13 日 (金)

なぜ人は泳ぎはじめたのか？

佐竹 弘靖 (ネットワーク情報学部教授)

スポーツは人類の誕生とともに始まる。

原始社会のスポーツは、生活手段としての食糧確保、つまり狩猟・採集のために実践を伴って行われた。そこには、今日的なルールや専門的な技術などは存在しない。しかし、ホモ・サピエンス (知性人) と呼ばれた人間の祖先は、二足歩行を始めたことにより発達した脳と、自由を獲得した手を駆使して様々な狩猟用の道具を作り上げてきた。

作り出した道具を片手に獲物をひたすら追いかける。ひとりでは無理でも集団を作れば獲物を捕獲できる可能性が格段に増すことを覚えた彼らは、ひとりひとりが役割を認識し身の危険を最大限守る最良の方法を生み出していく。まさに、現代のスポーツに見られる集団戦の様相だ。

その時代において、人は眼前に広がる川や海とどのように対峙したのであろう。

それが、本論のテーマ「なぜ人は泳ぎはじめたのか？」に繋がっていく。

二足歩行が人類の誕生の証と言われるが、後ろ足で立ちあがったことにより、「手の自由」を獲得したことが人類の大きな財産となるのである。さらに、二足歩行に伴って、肩甲骨の発達を促すことで、肩関節の可動域を広げることが可能にしたのである。その結果、人類の祖先は、石や物を掴み、獲物めがけて「投げる」行動ができるようになる。それだけではない。約 200 ～ 300 万年前に登場したアウストラロピテクス・アフリカヌスは、約 318 万年前に地球上に現れたアウストラロピテクス・アファレンシスよりも親指の関節が太かったという調査結果が出されている。これは何を意味するのか？

両者を比較して示された結果は、後者の方が親指の機能が発達していた証拠であり、より高度な手指の動きを獲得していたことを示すものである。

二足歩行によって、肩の可動域を広げ、五指を自由に動かせるようになった人類の祖先

は、さらに「脳」を発達させホモ・サピエンス (知性人) となっていく。

ホモサピエンス (知性人) である人類の祖先は、小さな集団であったとしても、組織的に効率よく獲物を追いかけて獲得していく術を考え出していく。

ある日、追いかけていた獲物が目の前に流れる川に飛び込み逃げていった。

人類の祖先にとっては初めての経験であったろう。しかし、獲物は泳いで向こう岸へ渡ってしまった。ホモ・サピエンスの知的好奇心が芽生えた瞬間であったに違いない。

「川の向こうに何があるのか」

「川の向こう岸に渡ってみたい」

「獲物は渡っているではないか」

「よし、行ってみよう！」

こんな会話が成立していたか否かは定かではないが、挑戦者はいたはずである。

しかし……。

「うわっ！足がつかない」

現実には、今も昔も変わるものではないだろう。

溺れないためには、どうしたらいいのか。

当たり前だが「泳ぐ」しかないのである。

では、どのようにして泳いだのだろうか？

今日、盛んに行われている「ベブースイミング」を参考してみたい。1 ～ 2 歳のまだ母親の羊水の記憶が残っているといわれる赤ちゃんは、水に入れると目をしっかりとあげ、両手を水中で上下に動かし、両脚は膝から下を曲げ伸ばしながら目的 (親や壁) に向かって本能のままに進んでいく。何も教えていないにもかかわらずだ。おそらくは、人類の祖先は、現代の赤ちゃんと同じような泳ぎ方を行っていたのではないだろうか。とはいえ、呼吸はどのようにもいたため顔は水面上に挙げたままである。今日の「犬かき」にも似た泳ぎこそが、人類初の泳ぎであったのではないだろうか。

その後続く古代文明での泳ぎの姿を見てみたい。

まずは紀元前 5000 年頃に始まり、紀元前 3800 年頃シュメール人が文明地を作った古代メソポタミア文明である。アッシュールナシルバル 2 世の玉座を飾った壁面の浮彫に見られる「川を渡る情景」(図1) では、兵士たちが空気で膨らんだ皮袋を利用している。戦闘服であろうか着衣した状態で川を渡るために通常の泳ぎは困難であったはずだ。そのため、浮き具を使わざるを得なかったと考えられる。次に紀元前 3000 年頃に始まり、古代文明の雄とも称される古代エジプト文明である。古代エジプト文明を代表するひとつにヒエログリフ (象形文字、神聖文字) が挙げられる。当時、文字は誰もが読めたわけではなかった。それだけに、そこに書かれている文字や内容は重要であり、意味深いものである。ヒエログリフには水や泳ぎを表す文字が多いことも特徴のひとつである。(図2) ナイル川には獷猛なナイルワニが生息しており、運搬用の船が沈没して川に投げ出されたり、船から誤って落ちてしまうと餌食になってしまう。「泳ぎ」の技術を習得することは生命を保持するためにも必要だったにちがいない。最後に古代ギリシャ文明を見てみよう。図3に挙げたのはイタリア南部サレルノ県にある「バエスツム」と呼ばれる遺跡にある「泳者の墓」の壁画に描かれたもので、裸体の男性が飛び込み台から頭を下にして飛び込んでいる姿を描いている。何故この図柄が選ばれたかを読み解く際に理解しておかなければならないのは、この墓に埋められたであろう男性がスポーツとしての「飛び込み」が得意であったからというだけにとどまってはならないということだ。当時のギリシャでは高度な技術や類まれな強さや速さを見せることのできる人物は、神により近い人間として垂涎的で見られたのである。そのため、身体活動は「神」との連関を強く感じさせる活動であり、儀式的意味合いを強く持っていたと考えられてい



図1 川を渡る風景 新アッシリア (前 883 ~ 前 859 年)



図3 パエストム 泳者の墓の壁画

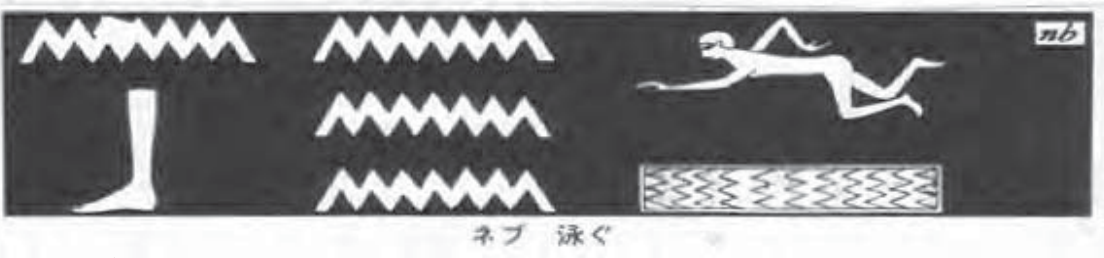


図2 ヒエログリフの一文字記号

る。つまり、この図は何らかの葬祭儀礼に関わるパフォーマンスであり、この墓に祀られた人物は特別な技術を持っていた「選ばれし者」と解すべきなのである。

「泳ぎ」は人類がそれぞれの地で文明を築き上げるに伴い、その目的や意味を変化させながら高度化していくことが理解できたのではないだろうか。(図4)

中世、近代、現代と時代が新しくなるにつれ「泳ぎ」もまた変化してくる。次の機会にその当たりを追求したいと思っている。

本論は、平成 25 年度 第 3 回専修大学スポーツ研究所研究会で発表した一部である。

泳ぎの歴史は人類の歴史

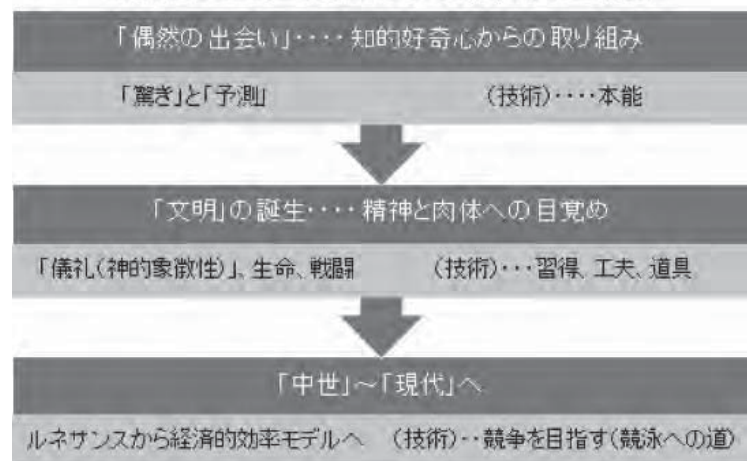


図4 泳ぎの変遷